

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ひざまづく道長

「関白殿、黒戸より」の章段をめぐって

●都立北多摩高等学校教諭

田口かおる

(たぐち・かおる)

盛儀の中関白家

いわゆる『枕草子』の日記的章段は、中宮定子を中心とした周辺世界へのオマージュである。清少納言が間近に道隆の全盛期に接していたのは、出仕した正暦四(九九三)年の初春もしくは初冬から、長徳元(九九五)年四月の二年前後に過ぎない。しかし、その後の記事に道隆一族の没落と道長一族の台頭の過程ででてきたであろう政治的なこととがらや不如意は直接的に描かれることはなく、ひたすら中宮への讚美が印象づけられるのが『枕草子』の世界である。中でも中関白家全盛期を表した章段は、(注)その華やかさ明るさを具体的場面として再現し、そのこと自体が中宮讚美となる構図となっており、そのような場面では作者は場面に登場するというより、場面を見る「視点」として

の役割に徹するという体である。「関白殿、黒戸より」の段は、まさにそのような趣で展開していく。

関白殿、黒戸より出でさせたまふとて、女房の、ひまなくさぶらふを、

「あな、いみじのおもとたちや。翁を、いかに笑ひたまふらむ」とて、分け出でさせたまへば、戸口近き人々、いろいろの袖口して御簾ひき上げたるに、権大納言(＝伊周)の、御沓とりて、はかせたてまつりたまふ。いともものしく、きよげに、よそほしげに、下襲の裾長く曳き、ところ狭くてさぶらひたまふ、「あなめでた。大納言ばかりに沓とらせたまつりたまふよ」と見ゆ。(『新潮日本古典集成』第二三段。以下、本文・章段数も『集成』による。カッコ内は筆者注。)

道隆の「猿楽言」で始まる、引用部のポイントはもちろん権大納言伊周が道隆に「御沓とりて、はかせたてまつりたまふ」という異例さである。伊周の「いともものしく、きよげに、よそほしげに、下襲の裾長く曳き、ところ狭くてさぶらひたまふ」姿のすばらしさを描写した上で、本来蔵人頭の役目である沓の世話は大納言ほどの高位の方に行わせる道隆への讚辞として、作者は「あなめでた」と記す。

(注) 田畑千恵子氏によれば、中関白道隆の生前・全盛期に取材する長徳元年四月までの章段群を前期章段、中関

白家没落後の年時を扱ったものを後期章段とした時、前期章段には、「叙述性」を特徴とした後期章段に比して次のような特徴が見られるとされる。

- (1) 衣装描写・容貌容姿に関する描写をもつこと。
- (2) 詳細な情景描写があること。
- (3) 登場人物の直接話法の多さ。
- (4) 「めでたし」「をかし」が(1)や(2)（章段の中に再現された場面全体）といった外面的な美の評価として多用されること。

「純粋な中宮讚美・一個の人格としての中宮に対するひたむきな讃仰等が、単独で主題を形成する章段」はむしろ後期章段にあり、定子・道隆・伊周といった主家の人々によつて、具体的な盛儀（暦日表現も多い）や日常生活の一駒が臨場感のある場面として紙上に再現される「場面性」の豊かさが前期章段の特徴であるとされるのである。

さらに、「関白殿二月二十一日に〔積善寺供養・二六〇段〕「淑景舎、春宮にまゐりたまふほど」（九九段）」といった道隆の全盛期を記した段では、「栄華の当事者自身がそれを見る視点」を導入し、道隆が捉えた情景を道隆自身が評価（満足感の表出としての^{〔注3〕}「猿楽言」など）し、作者が「めでたし」と統括するといった方法が見て取れると言われる。

本章段は全体的にも前述の二つの長大な章段に比して非常に短く、(3)に若干の不足はあるが、田畑氏の前期章段の

特徴を具備しているといえ、冒頭（引用部）からまさしく全盛期の中関白家の姿を呈示している。

道長登場の位相

続く場面、のちに栄華を誇る道長が、この道隆全盛期の盛儀の場に登場する。この段は『枕草子』全編を通して道長が登場する唯一の段である。

山の井の大納言（＝道頼）、その御次々の、さならぬ人々、黒きものをひき散らしたるやうに、藤壺の堀のもとより登花殿の前まで、居並みたるに、ほそやかになまめかして、（道隆方）御佩刀などひきつくるはせたまひ、やすらはせたまふに、宮の大夫殿（＝道長）は、戸の前に立たせたまへれば、「居させたまふまじきなめり」と思ふほどに、すこし歩み出でさせたまへば、ふと居させたまへりしこそ、「なほ、いかばかりの昔の御行なひのほどにか」と、見たてまつりしこそ、いみじかりしか。

「黒きものをひき散らしたるやうに」黒い袍を着た四位以上の高官が多数参加した大々的な行事のようであるが、ここには暦日表現もなく、季節も示されていない。何の行事であるかも一切示されていないが、時期については、道隆の関白在任時、清少納言の出仕時期、伊周・道頼・道長の官職から、清少納言の出仕した日以降、正暦五（九九四）

年八月二十八日より前のある日（次頁表のCの期間中）と推定できる。（次頁の表のように伊周と道頼が共に大納言であった時期はないから、このとき道頼は大納言ではなく中納言である。）というより、ここで明確なのはこの登場人物たちの官位と政治的位置だけであることに注目しておきたい。

ここで描かれるのは、宮の大夫殿道長が道隆にひざまずいた出来事である。正暦元（九九〇）年十月中宮大夫に任じられていた道長は、翌年九月ようやく権大納言となるが、同じ年には伊周は父の威光によって一気に権中納言になっている。「競射」など、『大鏡』の記事などに描かれる道長像からも、作者が「居させたまふまじきなめり」と感じたことは首肯せられるが、その道長をひざまずかせた道隆を「なほ、いかばかりの昔の御行なひのほどにか」と讃える構図になっている。さらには、このエピソードが以降この場面に登場しない定子との話題になり、段の最後には定子没後の「まいて、この後の御ありさまを見たまつらせたまはましかば、『ことわり』と、おぼしめされなまし。」という評言を導いており、これらからも作者が描きたかったのはこの出来事といえるだろう。

このエピソードは、道隆を讃え、そのすばらしさを作者が統括するという手法において伊周のエピソードと同質かのように見える。しかし、その位相は大きく異なっている。

（注4）渡辺久寿氏は前述の「関白殿二月二十一日に」の段

（次頁の表のA）を分析して、田畑氏が前期章段の特徴としてあげられた要素を並べるだけで、作者が「めでたし」と殊更言わなくても道隆の威光は表現されており、「作者としての主体を作中に確保せずとも書ける構造」になっているのに対し、「淑景舎、春宮にまぬりたまふほど」の段（次頁の表のB）では「めでたし」の語に内容以上の栄華を無限定に力説する虚構的機能が見られるようになっていると述べられ、この段を「栄華から没落へと推移する過渡的章段」と位置づけられた。（前年に道隆の病悩Ⅱ表の★があり、この年に亡くなっている。）

本章段に即して言えば、引用部前半の伊周のエピソードはその描写のみで「栄華」を描くに事足りており、主家一族の勢揃いをもって華やかな盛時を現出する「絶対的」手法による表現といえ、「あなめでた」の語も順接的に付与された言といえる。翳りなき絶頂期を表すのであればこのエピソードをもって充分表現しえたはずである。

しかし作者はさらに道長を登場させ、道隆にひざまずいたエピソードをわざわざ記している。ここでは居並ぶ四位以上の高官たちと同様道長もひざまずいたことが描写として描かれたのではない。作者が「居させたまふまじきなめり」と思った道長が、道隆の前にひざまずいたというのであり、道長ほどの人をひざまずかせる道隆を讃える作者の評言によってこのエピソードの意味が方向付けられている。時期では明らかに積善寺供養（表のA）と重なる絶頂期、

996 (長徳2)	995 (長徳元)	994 (正暦5)	993 (正暦4)	992 (正暦3)	991 (正暦2)	990 (正暦元)	989 (永祚元)		
	4 2 / 10 5 死 関白辞表 (43)	★ 11 / 3 病氣 B 1 / 19 原子東宮女御	A 2 / 20 積善寺供養 (42) (中宮・詮子行啓)	3 月 次女 原子入内 (41)		10 / 5 定子中宮 5 / 26 8 関白 撰政 (38)	1 ・ 2 月 長女定子 入内・女御	2 / 23 内大臣 (37)	道隆
4 / 24 大宰権帥 (23)	1 / 16 花山院に矢を射かける (長徳の変)	3 / 9 内覧 (22)	8 / 28 内大臣 (21)	8 / 28 権大納言 (19)	9 / 7 権中納言 (18)	1 / 27 参議 (18)			伊周
	6 / 11 死 (25)	8 / 28 権大納言 (24)			9 / 7 権中納言 (21)				道頼
	6 / 19 右大臣 氏長者 (30)	5 / 11 内覧 (30)	いづれの1日		9 / 7 権大納言 (26)	10 / 5 中宮大夫 (25)			道長
12 / 16 定子脩子内親王出産	5 / 1 定子出家	4 / 27 関白 5 / 8 死 道兼 (35)	8 / 28 右大臣 道兼 (34)	C この年の初春または初冬に出仕 清少納言	9 / 7 内大臣 (31)	7 / 2 兼家死 (62)			その他

() 内の数字は年齢

前期章段に位置する本章段だが、作者が「視点」としてのみ機能し、場面の叙述に徹するというありかたではない。ここで宮の大夫として登場する道長はもちろんのちの権力者であり、後半部の展開によれば、のちの政界の権力構造を背景にして「相対的」に盛時を逆照射するという、他の段に比して異質な表現となっている。この表現には、前述の渡辺氏が「過渡的章段」に頻出する「めでたし」と同等またはそれ以上に「栄華を無限定に力説する」叙述意識が働いているといえ、絶頂期の記事でありながら、翳りを内包した表現になっているといえるのである。

このことはどんな意味を持つのだろうか。

後日譚の時期

「関白殿、黒戸より」の段後半は、前半の記事をどのよう^①に受けるかという点でいくつもの解釈が存在し、一定の説を見ていないとい^②ってよい。解釈上のポイントは次の①～⑤の部分である。

中納言の君の、①「忌日」とて、くすしがり、行なひたまひしを、②「賜へ、その数珠しばし。行なひして、③めでたき身にならむ」と、借るとて、集まりて笑へど、なほ、いとこそめでたけれ。

御前に、きこしめして、

「仏になりたらむこそは、④これよりはまさらめ」

とて、うちゑませたまへるを、また、めでたくなりてぞ見たてまつる。大夫殿の居させたまへるを、かへすがへすきこゆれば、

「例の、⑤念ひ人」

と、笑はせたまひし……。

まいて、この後の御ありさまを見たてまつらせたまはましかば、「ことわり」と、おぼしめされなまし。

紙面の都合上、主な解釈を整理すると次のようである。

時期	⑤	④	③	②	①	
行事直後	道長	関白	来世のすばらしい身の上	道隆の猿樂言	中納言の君の親族の命日	旧全集
道隆没後	道隆	関白	関白のような立派な身	他の女房の言	道隆の命日	集成
道隆没後	道長	中宮	中宮様のような身	作者の言	中納言の君の近親の命日	新大系
行事直後	道長	関白	関白のような立派な身	作者の言	中納言の君の近親の命日	新全集

大きな違いは、最後の評言を除き、この後半部の後日譚を道隆の死後の出来事とするか、前半部の行事からそう遠くなく絶頂期の出来事としてとらえるかにある。

詳細を述べるゆとりはないが、この記事について言えば描写のみで自立するまでの記事ではなく、波線部「めでたし」の語のみが目立つ。道隆を讃えるため道長がひざまずく様子を繰り返し返した作者に、定子が道長を「例の念ひ人」と切り返すとみれば、定子の機知、明るさが出て「完」とはなるが、「行なひして、めでたき身にならむ」の発言を皆で笑うことについても、定子が「仏になりたらむこそ、これよりはまさらめ」といったことについても何が「めでたし」か「めでたくなる」のか明確でないのであって、前期章段の書きぶりではない。

しかし記事を道隆死後の没落期の出来事とした時、『集成』説では女房たちの不謹慎なやりとりを定子に伝えることは告げ口めいてかえって定子を悲しませることとなり、道長の行為を思い出として繰り返すことよって、逆に現在の不如意が浮き彫りにされ、道隆讚美は空虚に響いてしまふこととなる。『新大系』説も、前の行事で道長がひざまずいた際「なほ、いかばかりの昔の御行なひのほどにか」と感じた作者が、道隆没後の不遇であつても「現世で中宮となつた定子のようなすばらしい身の上になりたい」と言つたエピソードを定子に伝えたとすれば、その後の「仏になりたらむこそ……」のことはやはり不遇を浮き彫りに

にするように思われる。

このように考えると、後半は『新全集』のように前の行事からそう遠くない時期、道隆の全盛期といえる頃の定子とのやりとりと考えるのが妥当であろう。とすれば、表現方法を規定しているのは記事の時期ではなく、その構成意識であり、本章段について言えば末尾の評言が明確に指向するように、中関白家の栄華の翳りを投影して道長の栄華から逆照射する表現意識が全体を貫いていると言えるのではないか。本章段は、『枕草子』が道隆一族の華やかで明るい世界を現出しながら、あからさまには語らない主家一族の運命の変転を引き受けつつ表現する意識がかいま見える章段である。

注1 三田村雅子氏「枕草子の表現構造―日さしと宮仕え讚美と―」他『枕草子 表現の論理』有精堂一九九五・

二所収の一連の論文

注2 田畑千恵子氏「枕草子日記的章段の讚美の構造―朗詠と伊周像をめぐって―」『中古文学論攷』第六号一

九八五・十「枕草子日記的章段の方法―中関白家盛時の記事をめぐって―」『中古文学』第三十六号一九八六・三他 一連の論文

注3 『枕草子』で、道隆の「猿楽言」が描かれるのは「関白殿二月二十一日に」の段、「淑景舎 春宮にまゐり

たまふほど」の段とこの段のみ。

注4 渡辺久寿氏「日記回想章段 栄華から没落へ・その「過渡的章段」をめぐって」『国文学』一九八八・四